911.3
八

一具庵大人撰

俳諧故人續五百題

江戸書林　萬笈堂
桂林堂

人心不同猶如其面作俳句者亦復自甫狙我所好以譏彼彼亦狙其所好以笑我至侮讐相視者非惑之甚乎予晩年慕慧翁遊于松窓之門雖未能入其

室、螢雪工夫殆費十數年、暇日涉獵諸抄撮摭以為一冊子、聊以付尚友之義、近日書肆某乞梓以行世、予謂此集一時隨聞見而録之、初無示人之意、取捨或未盡其公也、雖然寒鄉僻地、晩生乏資者置之於几上則、江山風月自在其中、亦不為無助矣、松窓嘗曰、古人所好、一一異其躰裁、苟能蒐羅則可為大家

也然則此冊雖小、安知非
其楷模哉
文政己丑春正月
一具庵一具
九世十方空二書

百様のふるまひなるべしとあるべしと
ふるまひをいとなみて大廈高楼を
方寸の内にうつすものすくなし短
句もてあそぶもまことにうなり
けりいかにかこれを昇平鼓腹
の御代のしるしとやいはん
市ゆく帳壺の花の夕漁村の雪

此あけぼの盃をめぐらし舟をなかしてこゝろぬ人なんるりけるをうらいなかしと風雅の二字は眼とゝめてこゝろを身あまらうるこゝろきいてむとおもひうまるいましかしてなり

一具菴主このさとのらくぬるおとろこゝろをなけきてたやきこゝろ

たやしを法つゝ園子實拾て句農まひめおきくゝをぬこあまこ此家事はちらをもちるのあまりあふらちを生えて櫻まを

きくちくふなしをあハしうのきくしかまてめいてくるものなしと俳諧のこゝろ心をうして

画棟虹梁とくとくとんとんいとくとな
き準繩ほらんとも
文政己丑もちまつき
こくこくこくこく日

大雲栗菴

柳亭蔵

古人續五百題發句集

春之部 目録

花　初下
もて囃　四
櫻　二
さくら櫻　三
八重櫻　一

歳旦

元日　四
著衣初　五
年の春　六
歩慶　七
大ふく　七
雑煮　八
さくら日　四
さくら餅　五
新妻　六
門松　七
歯がため　七
太箸　八
初かすみ　五
こゝろみ　五
餅代の春　六
うゝもろ　七
書初　七
万歳　八
新玉　五
玄ゝろ　五
福寿草　六
ゆゞろえ　七
屠蘇　八
蓬莱　八

かみ餅　八
若水　八
年玉　九
ゆりそど　九
水いらこ　九

植物之部

子の日　九
小松引　九
七種　九
なづな　十
玄扶州　十
若菜　十
芹　十
梅　十
析　十二
ところ　十二
千菊　十二
若草　十二
桂　十四
子稿　十四
木のめ　十四
ろく緑　十五
蕗の落　十五
蓬ゝもち　十五
らつもぎ　十五
すみれ　十五
ゆんわ、　十五
ぜんそし　十五
めざみ　十五
木瓜　十六
芦角　十六
接木　十六
うど　十七
茶ぜみ　十七
菜の華　十七
種おろし　十七
挑　十八
海棠　十八
連翹　十八
梨の花　十八
杏　十九
ぢんぢ　十九
木蓮花　十九
草むぎ　十九
苗代　十九
ろくそ　二十
茨　二十
山吹　二十
はこべ　二十一

生類の部

鶯　二十一
初との巣　二十二
白魚　二十三
雀子　二十三
百千鳥　二十三
雉子　二十四
ゐるの巣　二十三
帰雁　二十九
乙鳥　二十九
駒鳥　二十六
ゐなをこ　二十四
麦鶉　二十六
蝶　二十六
蟲　二十七
うぐ　二十六
鯛　二十七
蛙　二十七
田螺　二十八
蜂　二十七
蜆　二十八
若鮎　二十八
飯鮒　二十八
蕗角　二十八

時候之部

佐保姫　二十九
むめさき　二十九
きさらぎ　二十九
弥生　二十九
左義長　二十九
霞　二十九
おぼろ月　三十
月中　三十

殺入 三十一　餘寒 三十一　河かる 三十一　燒野 三十一
雪間 三十二　殘雪 三十二　東風 三十二　玄風 三十二
雪解 三十三　玄鳥 三十三　玄鳥 三十三　春の日 三十三
玄の夜 三十三　春の海 三十四　玄の月 三十四　玄なる 三十四
春の野 三十四　玄なる 三十四　水ぬるむ 三十四　海雲 三十四
海苔 三十五　寒食 三十五　草餅 三十五　陽炎 三十五
糸ゆふ 三十六　二日灸 三十六　初午 三十六　彼岸 三十六
伊勢 三十六　浪餅 三十七　西行忌 三十七　永き日 三十七
出代 三十七　雛 三十八　鶏合 三十八　汝亡 三十八
馬刀 三十九　曲水 三十九　畑うち 三十九　長閑 三十九
いろれ霜 三十九　峯入 三十九　行春 四十

通計百五十二題

古人續五百題 發句集 夏之部目録

生類の部

ほとゝぎす 初丁　閑古鳥 三　花鳥 三　鳥なき入 三
ひゝ雀 三　翡翠 三　羽ぬける 三　鶉 四
水鶏 四　ゐる札 四　水鳥の巣 四　ひゝ鳥 五
かやくり 五　羽蟻 五　あまうり 六　蟇 六
ぶゝむし 六　蚤 六　蠅 六　夏の虫 六
蚊 七　蚊やり 七　蚊帳 七　蝸牛 七
蟬 八　空蟬 八　蛭の子 八

時候之部

更衣 八
ほつつじ 十
夏菰 十一
新茶 十一
麦秋 十二
蜩 十二
卯地うち 十四
入梅 十五
夏の月 十六
蒸うち 十七
青田 十八
帷子 十九
あつさ 九
卯月 十
夏書 十一
茶摘 十一
小角豆 十二
つばり 十二
競馬 十四
虎が雨 十五
夏野 十六
田植 十七
田草取 十八
祇園会 十九
青簾 九
皐月 十
濯佛 十一
風呂 十一
かりがね 十三
粽 十四
竹酔日 十四
夏山 十六
早乙女 十七
あつぎ 十八
氷室 十九
菖蒲湯 十四
五月雨 十五
夏の日 十六
夏串 十六
早苗 十七
うちわ 十八
雲の嶺 十九
虫ぶし 二十
外妻人 九二
ととうそん 九四
さらし井 九九
秋近し 九九
夏乞 九五
あつさ 九一
そぐみ 九二
笋菜瓜 九四
行ぶくん 九九
不二清 九九
登簾 九三
夕立 九一
風うちわ 九三
沖鱠 九四
夏痩 九五
伊勢 九六
千土用 九二
簟 九二
うち水 九三
清水 九四
川狩 九五

植物の部

卯の花 九八
実ばたらし 九七
青嵐 九八
夏柳 九八
食蔵の花 九九
若葉 九六
ちげり 九七
古盤木蔦葉 九八
ちさ樹 九九
雪後盆子 九九
若楓 九七
夏木立 九七
桐の花 九八
樗 九九
古きうの花 九九
茶摘 九七
下闇 九八
そら豆柚 九八
栗の花 九九
樹のそら豆 二十

百日紅 三十
燕子花 三十
ぼたん 三十
芍藥 三十一
葵 三十一
蓋のそれ 三十一
けし 三十一
荊 三十一
牛の子 三十二
蚊帳 三十二
茄子 三十二
あやめ 三十二
紅はな花 三十三
夏菊 三十三
撫子 三十三
百合 三十三
たちあふひ 三十三
ちさのはな 三十四
藻の花 三十四
檳榔 三十四
紫陽花 三十四
萱草 三十五
あやめ 三十五
タぐれ 三十五
萍 三十六
河骨 三十六
蓴菜 三十六
蓮 三十六
蓮葉 三十七
おりぐる 三十七
蔺の花 三十七
菖蒲刈 三十七
若牛 三十七
林檎 三十七
都合 百五十二題

花

古人續五百題發句集

春之部

あとふらく花ひたてよ花の雨　貞德
ちれかくとそうて花の芳野哉　貞室
花をまふこの山風やはしたくみ　季吟
武蔵野やけふより出てきそ花の酒　宗因
目うつりや花よもせるくらゝ世山　鬼貫
花ちらす山を日こゝろの釣ほうけ　芭蕉
さくら花とれもとれもとれもとる童名哉　立圃
花さうりいたくみやこの酒盃くれ　宇武

花さうろうてあるゐ夫婦なる
を好みよも毛虫よなるゝ家樣
ゐる人ふあたしくと花見か紫
うゝくと歩てゝ花見の留を居共
花さいてゝ死ともないゝ病ひゐ那
を好を一枝ゆるや葛城をゐまくら
河茶るや西行庵りを好よゐせ
首出て岡の花見よあゐひとを
ゐふまてあをふ日ゐてを那見ゐ二の角
花ふゐりれて夢ゐゐ歩ふ死んゐる
大佛ゐゐふ花のゐゐりの茶の茶
樣の袈裟ゆをゐ直をや花の中

其角　野坡　北枝
嵐雪　越人
去来　路通
丈草
来山
正式
言水
荷兮

昆布出ゐや花ゐ氣のゐくゐゐ
酒部や小琴の音せよ窓の花
大峯やゐゐ壮の奥ゐ花のを
山やを形頂根くの酒をやー
めつゝしや内ゐゐ花見の初やゐる
朝をゐの酒を氏膳や庭の花
ゐゐ花ひや初花ゐゐの物ゐを
兄弟のゐゐゐゐ花の附
数ゐをゐを酒ゐを人よゐ
苞蕉のあとまるゐゐゐゐを
藥喰ゐゐ旬ひををくゐ花ゐ
常歩ふをゐ且々ふゐ花の鳥

利牛　惟然
曽良　亀洞
杉風　孤屋
野水　蒲弾
舟泉　傘下
分我　千那

櫻

あくけるや風車寄る花のとき　薄芝
そるの山ことゝふ年人し武よ年ん　晨風

鶴の巣ふ嵐の外はさゝふこの夕　芭蕉
あをあとゝ櫻さゝ生とつゝひ武　其角
櫻ぬまそうゝくとゝるひとり武　秋風
を敷ゝもこれやゝゝ行ん山はそら　如泉
かけふゝゝ降生きれけゞ櫻かゞ　支考
蘆寺かくまねりのハさゝ良の雨　李風
殺を牧川妻餅ゝる櫻茶毛　嵐雪

足あとをさゝらりまゝる菴二ッ　杜國
一枝ハたゝゝぬもゝろ一山はゝゝ　尚白
おちつきハ奥やまゝせや櫻こゝと　利牛
雑の声もまこゆるゆまを久ら　凡兆
屋形ふ拾上社の櫻ちりふけゞ　杉風
考の物社宿まゝ入ゝや山櫻　丈草
食の附これあゝまゝやゝさ住ゝゝ　呼坡
櫻ゝゝ行ゝゝゝる乞食ゝ　梅舌
ゝゝきゝと者刃のこゝ櫻この那　荷兮
蒟蒻の各物ゝゝん山を之良　李里
筆ふゝて墨深櫻かゝはゝら　德元
泥ゝゝもせん菜てゝよ姥さゝ　重頼

初櫻

素堂　宗因

露沾　鬼貫

素堂　芭蕉

去来　沾徳

沾荷　閑指

八重櫻

芭蕉　鬼貫

吉保　沾圃

幸和　甚角

鬼貫　祐甫

柴雪　常久

遅櫻

元日

元日やおのへさびしく秋めかれ　芭蕉
元日や月こわ人のはしめ音　其角
元日や澎くとこくいろの石垣　志雪
元日や土佐うらうらは新もせも　去来
元日も旅人をゝる驛うま　沾徳
元日を明をゝしたる震う形　一笑
元日のあけ間の競馬見ゆし　重五
元日や夜ふかき衣のうち表　千川
元日やまこと瓦ゆ松のゝ形　猿雖

八重たつ日

梅ゝ香の船ふ立まる初日ふ新　支考
亀の背ふ海老ほのあけ初日山　鬼貫

初霞

霞いろや大ゝけの初日かけ　注行
朝紅や小ゝくくしたる初かすみ　鬼貫
枇杷の実ふ花ふたゝるゝ初霞　斜嶺

新玉

ゝゝ玉の馬もあり代をむ丸　嵐雪
鳥の爪西あゝ玉の手ゝちゝる　鬼貫
あゝゝまりあてまりゝる春日ゝ　貞室

着衣始

袋ふありてたゝしの綿やきを始　宗因
毋ゝこの紋ゝゝしや呂衣をゝめ　山峯
袋ゝをゝへいゝ墨の袖きをけゝ　しゝく

初夢

はつ夢や額ふあつは扇子より　其角
ゆめ覚て浪のうつ音や泊瀬寺　嵐雪
初ゆめや濱名の橋れ今の春　越人
ゆめ夢のよきこと古や三ケ日　閑光

ことよみ

下りめ古ふみ一生のこころみうれ　徳元
伊勢雪みちれおくすてこんれうり　幽山

年玉

なるこゑや新年ふくる五月五月　芭蕉
春立や星の中ゝら松の色　鬼貫
年と春とゝん天の戸やゝあれ　正式

今年の春

傘にたゝ名かゝゆのとゝ郭のイ名　守武
我名式ゝ宮ゆゝ名やりされ去　貞室
今年の春奥孫も有房も有摂を宮　嵐雪
刀ゝれ供もつゝたゝしゝさのゝ体　正方
伊勢浦やお木引体ゝ伶明の去　軍制
けさの去海ハはとあゝ麦のゝら　雨桐
神ゝゝて松の宮祭ゝ名ゝ彩れゝ去　梅舌
名ゝの春宮ゝかゝらさる用ゝの那　冬松
佛ゝゝ神そたゝゝきけさの春　と文

花の春

二日ふもねゝゝハせゝゝ花の去　芭蕉
稀々年や日もゝとんけの花の春　李吟

御代の春

おりゝろやはの初折の句は　宗因
まつ系の多いところで句のくばり　惟然
あれ人のまかゝもかゞしなれ　古梵
五十あて四谷ところ〳〵花のくる　嵐雪
鬱形てい達しいめても句は　去来
背さらおふりのをこせそや花のちる　野童

福寿外

昌陸の松ゝ侍きね御代の春　利重
治まる氣やアんとゝのこよの春　正式
福寿外一すりのゝはゝえなり　言水
らく青草やハりこの梅は花　高九

法慶

新寿の御祝ふ八ふくれ言ひまゝ　宗因
長松ハ彩の名ゝて寿ゝ法慶ハ　野坡

門松

門雲中ゝ〳〵為わゝゝ武庫の山　鬼貫
ゝゝゝ門の松ゝそめゝゝゝ色姿　宗因
門まつもかさゆるき日ねあゝゝ式　正式
まゝゝ門や二ゝんめゝゝれ門の雲　徳元
門ハ松苔薬園の雪寒し　舟泉

うぶ公

山柴ふゝゝ白まゝ〳〵亦竈ゝる　重五
ゝゝ白もゝゝゝる神の馬色代　胡及

楪

ゆづりはの葉や次まつ小家の人がさう　左傳
楪の世阿弥まつりや青かしら　嵐雪

大福

大ぶくや淡路もみさん茶臼山　鬼貫
大ふくやけふとそもる江戸茶式　正安

歯固

もかさ云やさん云さして水の恩　言水
歯固や鹿茸の神はめ〜んゐと　直良

書物

書初や行年七十拾州の位　宗因
ゆさりとやゆふぬくとてまぢめ　其角
きさらのもまうや震の之をかく　貞室

屠蘇

とその酒八ゆ〜玉盃の小亀ろな　李吟
伯夷酒や武蔵州も君う万歳盃　正隆

雑煮

延寛牛もさふをとわりちゑ　をて
を煮や和泉の松木えのさゝは　其角

太者

ゆとそ〜や左敵の役はおそ〜ぬ　唯笑
まんさいやゆ富士の山表めけの表　秋坊

萬

字ぞ

ぬけてきて子ゆまつせろ万文楽　青雲
万歳の字を隣ゆ州ゆ〜ちゑ　一升
荷兮

蓬集

蓬葉の松ふるやゆ恨の雲　其角
蓬葉をかけくかさるや老れ袖　維舟
蓬葉や船の匠はかんるくと　湍水

鏡餅

古家は日ふとせをそゑ鏡餅　宗因
むくるやよれ一所料の読りち　貞室

若水

若水や九ふ年の清る魚ふそ　風鈴
ふる水やふふふくしき蓬氷　武仙
ひつふをちちうひてふる雪の掬　亀洞
ふふふ鏡のそふ流しさよ　重角

年玉

年玉をとれふまてもえ方ふ　可茂
生しふふふ古風をあふく扇ふ　徳窓

遣羽子

羽子板の絵松原花やゆとの春　季政
ふ絵はふふ羽子ふとゆふ子供ふ　満水
そこ板の笛ふふ寄ふ夷れ雪　吾仰

子孩

生死れむふし男そと水ふふひ　其角
ふふかしの森やふ絆ふ孩ひ　丁我

子孩日

松脂ハたふ膏薬の子孩日ふ角　奥徳
腰ふれしふの日れ歌やいまふ雲　李吟
ふふれて渉もはふふ孩の日ふ　貞室

小松引

宗因

幽山

其角

七種

嵐雪

其角

俊似

野坡

泊徳

貞室

薺

芭蕉

鬼貫

舟竹

無論

嵐雪

其角

山川

此筋

鬼貫

來山

芸の草

若菜

隣はらしらしらしあるひらる若菜哉　負室
夏の野ふはくくそなるろろ菜摘　鬼貫
そくくくと雪付てそよいろ形ろろ　来山
袖若菜もりとの宿のとろろ汁　芭蕉
ろろ菜摘あとろ水を割畠ろな　越人
うかれ雀妻よよ里の名いろ菜　其角
一かふの牡丹ハ寒き若菜ろ形　尾頭
ろ市や寒ふ漕ろふいろな舟　嵐蘭
霜を若ま雪に樂まる為菜哉　荒雪
猪出して摘ろもろそれ為菜の郷　野水
吾ろろふ残りてれろやろろ菜ろれ　素秋
ふふまるふ菜ちを出くふふ若なの自　素行

芹

出出くふふろの跡のろなこの郷　小春

我ろろ鶴ろこのこをせりの食　芭蕉
沐ふ警芹流ふみろまこの素　其角
摘ろりもろるふひまろる根芹哉　亀翁
芹摘ろてこけて酒なれ泥ろこれ　且藁
初鮒やろ田の小芹ろまを　定耕
芹ふもや浮雲行一そるこるてり　野徑
名也けり芹の白根のかみあふ　幽山
地の底ハ雪引出を根芹この南　負室

梅

芭蕉　手鼻うむ音さへ梅のさかりこの京
去来　高瀬や海より流れてうゑの名残
丈草　江戸根の梅ひらきさかり烟出し
其角　梅が香や乞食の家もそなつかし
嵐雪　梅干しやうるうて寒う梅のとな
野水　さかり形ばかり梅ばかりまる月夜かな
曾良　病後の庭そこく梅のさかりかな
越人　梅の花ちるの乳ふらくねけしき我
惟然　おりつきて遊ぶは梅が散くふちまと
千那　痩馬や作りもふれの軒は春
野坡　こもくふ咲そろふ梅の花
支考　日あたりの梅さくこゑ下肩牛角

宗祇　花白ふ梅そ名双のこと名う宮
貞室　あいてこそあんの香もさ〜梅の花
季吟　北面の月行ひろんまとのむ光
宗因　星とり登そいあるもと梅のそな
露沾　梅一木はもこく草のそろそろ形
鬼貫　梅を名乙もものれ花ものもと
竹亭　白雲をそろもきろる梅の花
鴎歩　寒る居く折ふそそかし寒れ花
万乎　あくふ〜北羽年寒まこ寒れ梅の花
利牛　梅さきて湯殿の宿まるかしけと
曲翠　寒さくや白の挽木のよきまこの
來山　梅のそ形名ふよひよくて白ひこの角

栫

芭蕉　うれりのゐ栫のさらるもゆへの那
貞室　小風ゆまーてあるのやなきる
宗因　池ゐゐみとりをらをくゆるをかる角
鬼貫　をふの日を栫ゐゆりて川をとゐ
季吟　栫をみのをゐるとゆひる三日の月
素堂　沈ゐ鶯をーかゆるきゐるふ栫をけ
戈餐　おりをひ出をくりのゐつかーき栫をる
其角　傾城の賢ゐゆをこのゆなきる角
嵐雪　因業ゐ扶けく雪や栫この寺
李来　青栫のをいてめをふ板戸ゐ
丈草　引ゐせてをるーかゆる栫この宗
越人　ゆをもなーとる川やをきる角

尺をりをもをるをぬる栫この角
をうれくく栫を風ゐをりけをて
よをを川柱をを紙なき栫ゐれ
朝日二分のゆきのををく白ひる
をゐりをもてじて柱ーゆ形き代
障子とー月のゐひをを栫かゐ
町ゐをくをををー宿のやゐをる
せきををの屋ゐ又けをる御我
やふの雪栫をりをすをこの郡
好く風ゐ牛のをきむく栫かゐ
青栫れをうれや鯉のをみをを孤
をををへき姿をもをー指やなき

小春　尺をりをもをるをぬる栫この角
一笑　をうれくく栫を風ゐをりけをて
尚白　よをを川柱をを紙なき栫ゐれ
荷兮　朝日二分のゆきのををく白ひる
湖春　をゐりをもてじて柱ーゆ形き代
素龍　障子とー月のゐひをを栫かゐ
利牛　町ゐをくをををー宿のやゐをる
一風　せきををの屋ゐ又けをる御我
杏雨　やふの雪栫をりをすをこの郡
探丸　好く風ゐ牛のをきむく栫かゐ
一喫　青栫れをうれや鯉のをみをを孤
春水　をををへき姿をもをー指やなき

野老

ところ爪声大原のさとひろめ
夜毎ふらとや野老や市の中　其角
ぬかしくや今も丹波の鬼ところ　苔蘚
下萌や尾ぶとそとゆるのとれ雪　真丸

下萌

下萌の氣ぶとをけさや其の老　二川
若草やきのふの箭又も木綿掛　李由
いろ草ふたつ祝ふましや羽ぶとを　宝角
之白ふ若草ふさこそ羽ぶ　野坡
ふるくさはるかふ春ふ　亀助
若草をしふ春駒のふとけふ　門津
良俊

若草

椿

うぶひもの笠ふとしふる椿　芭蕉
焼の法ふへふ　荷分
藪ふふ　卜枝
鋸ふかふ　嵐雪
校ふ伐ふ　車来
ちり椿ふ　湖春
取ふ　野坡
椿ふ　洞永
紅ふ　戔香
土ふ羅ふ　鬼貫
孤屋入ふ海底ふ玉ふ　宗因

紅梅

紅梅ハ淮ふ[illegible]一番の深小袖
梅や紅人のけそひの初かみ　立圃
紅梅の数多や仙家は庭の雪　鬼貫
和梅やこんな所に玉そこと　元水
紅梅やかの浪間寺やうれ道　芭蕉
紅梅や比丘より劣る比丘尼寺　沾徳
　　蕪村

木の芽

そやされてさうな猫も木の芽哉　露川
木の芽こうこう雀かくれやねぶそう　均水
うれしこも去年の残穂の木の芽哉　野蝶
きのめ手て四方をそろへまきをれ　玉軸

若緑

の[illegible]やうな神の連歌のうち緑　鬼貫
[illegible]みとり神の[illegible]松ひ[illegible]ふれと　来山
黒ゑとの雲のそこもや[illegible]　土芳

蕗の塔

駒とんで雪[illegible]価ふ蕗の塔　其角
[illegible]出堤の切目や蕗のとう　拙候
生てある蕗のとうや山路うな　即章
[illegible]紙燭消ても好きのたう　調竹

茎立

茎立やたう五條あるうりそ妻の　百里
[illegible]たりそ茎立ふとる明ゆき　野徑
[illegible]賢こ人茎立の園ふかくれしや　一露

五加木

すみれ

鬼貫　忠知
几董　荷兮
夜章
曲水
野坡
鳴雪
馬莫
如貞
その

吟ておのきやくていひしまを五架飯
うこき垣こやこの客をのをきれり

仏のきもはうれさ去もの菫この角
初ふしと馬ものくれ菫草菫草
おりくけわ松の茎ろく菫ろ松
菫艸小鍋あふひーあとやこれ
法度場の垣より内へををを我
茶苅くすこれえり知と菫北
堤より出ろし落れへすこれこの
松ろけもさくへ硯のをこをかり
さろね冥もりのかをきれを菫我

はぐし

蘭

たんりのさのそうかくれ日なみ式
教草やうそそのまわきはくを
あんほりの物いこの日を仏の坐
をこくを猫やはまはやはくし
はくし頭巾にうるるとりより
をこくと親子はみりつくし
春雨もたくき出ーたり土筆
をこくと紫山子のけるを去筆

普松　其角
栄春　書江
衛門　舟泉
乙志
蕉笠

行蝶のとりのときねあさこうれ
をちこの野辺のあさみや陽形鬼

燭遊
三九

木瓜

草庵袋や野へのてうふ木瓜の花　銭蓮
かけうふの底で燃るや木瓜のそる　芦文

戸角

ゆびさへ入るくら角出と濱の芦　路通
はのくるやとて紙の鬼の面一后　勝重

接木

捨稲や梨の接穂や山ゑのき　芭蕉
はまゆのかくしう行る接穂哉　傘下
世の中とまこと入かきふね接木哉　淳兒
長れさや接木ハそねの咲おくれ　清門
一方ハ梅さく枝の接木この南　越人

獨活

雪間より落柴のうしろ笑ひ那　芭蕉
せうしなる角ハ痩ゆり仏の獨活　嵐雪
いとゆふ白ひきのそ色はてうと　配力

茶摘

ゑ治よきて扉風ゑ仏る茶摘哉　鬼貫
柴舟の里ハ茶摘の水けつて　其角
叡の根やゆけてゆり出と茶摘唄　去来
ちろふさや茶山ちよりふり返れ　正秀
たうの瓜もとる日とそろふ茶摘哉　丟茂
旅人の一茶ふとちきる茶つこう有　杏西

菜の花

菜の花や一本咲しあとの雨　宗因
山吹の雫菜の花のかとち鳥なくや　芭蕉
なの花の小坪うふ角なかりみて　其角
菜の花の吐息にうつる日影かな　傘下
なの花の花や出るやぬり壁　図水
なの花や枝葉の土まのあひくふ　長虹
菜のくき形の畦うち残をゐるめこう　清洞
麦のまあふ菜の花かくれめしるる　不悔

種卸

菜の花や天氣定りて種おろし　其角
古河の流まとと引のなねおろし　蕪村

桃

我庵は伏見の桃のあるかぎり　芭蕉
菓子屋にけしの人形や桃の花　其角
おのくの桃のむしろや等持院　嵐雪
ひるゝ花ふのるやふしえの桃の花　桃隣
あやもゝもおもしのこと色桃の酒　傘下
桃柳くれりのくやかの子　羽紅
りくのそる境ちまくれ垣根うれ　鳥巣
日の入や舟ふ見てひりくのそる　一髪
金相はまと盛りなり恵よそな　介我
梅さくふ中をたるまとりくの花　水鷗
角蓑の鍬ふありとも桃はそ家　鬼貫
梅ハ砂ふなりるるものとそくの酒　負室

海棠　普船
連翹　卜宅
梨の花　豊重
　　甚角
　　史邦
　　巴静
　　麦雨
　　峡水
　　鬼貫
　　許六
　　野童

海棠の花ハこちらより夜の月
海棠ハ女郎と猫とかふろ名
海棠の花ハ九蔵ゟ
海棠の花のうつくしやおろ月
海棠やお八ッうちぬを堂の苔
れんきゃうや茶ハ山吹と捨さそる
連翹や折ふゝふ月雪み
れんきゃうの白しく庵の風ほ
梨つゝと人ハ立ゝ雨のそな
梨の花ゝ人ハ立ゝ雨に似ゝ
梨山ゝ花ゝ雨ハ雨ゝ

杏　負徳
辛夷　暮四
木蓮花　羽長
　　梅車
牡丹　負因
　　安静
　　鬼貫
　　沾徳
　　春水

杏ゝ花ゝ人ハ杏の花ゝ
杏ゝ花ゝ人ハ杏ゝ花ゝ
辛夷ゝ花ゝ人ハ辛夷ゝ
辛夷ゝ花ゝ人ハ辛夷ゝ
木蓮花ゝ人ハ木蓮ゝ
木蓮花ゝ人ハ木蓮ゝ
牡丹ゝ花ゝ人ハ牡丹ゝ
牡丹ゝ花ゝ人ハ牡丹ゝ

苗代

苗代は花のちるころや尾さとさき
ゆくころや庭訓往来の畔伝ひ
迷ひつゝ苗代ころの田に移ること
苗代や八十八夜に出雲歌
人形へなへしろまるまたてろ形
苗代はまくやあくるの亭の種
なへしろや此土とかへして隅田川
畷道やなへしろ附の角大師
ほとゝぎす苗代寒ふあるる風
苗代や法度人行てまとはる
なへしろ鴉や鍬を鍬ちりふるり

嵐雪
宝角
永花
木也
元春
徳元
資仲
正秀
仙化
鬼貫
蕪村

蕨

早蕨や谷の雪ふるところ
里人と相よるところや独活とぶ
菜刻この上まとを掘る蕨こな
ちゝんゝや大木のきら山さら蕨
ちる人ふまとさけさるつゝじ北
関こえて爰も茶しろこうさ我
白茶と砂味噌よりふ雫名
小坊主ふ見なけかゝん松は藤
風なくて静ときこうふちの茶
茶の枕やえてくゝむ人のさろ形
松は茶鮒木ふのほるけしなり

負室
宗因
其角
幸順
勝政

宗祇
其角
嵐雪
杉風
負室
宗因

西吹

ぞーとこそふる居の後のはちと我
とも世と後ふ深さ〜墨ころも　荷兮
山藤のもとのゆるみ水机う甫　宗波
あらかく岩ゐらやや後のそみ　去来
後やたく君ふれるもとわれ　丈草
山吹や笠ふさと人き枝のなよ　芭蕉
月雪ふ山ふき花の素執よー　冬角
山吹の衣ハ黄金の肌ふこの甫　季吟
やまふ花や垣ふ干しる蓑一重　園指
一さうと山吹のそく久ゐ初ろれ　潔雪
山吹もちるうあふの舞さまも　洒堂

山吹

とりの花と山吹のそく岩根の甫　蓬洲
山吹と蝶のまきれねあしとうれ　卜枝
やまふきやたえあふ蓬の玉うら　貞室
山吹やさうと地ハ花のそこ　鬼貫
やまふきやた久と落る花の水　半残
花ちとおりふとりく赤はし　宗鑑
裾山や虻吐くあとの夕躑躅　芭蕉
赤これより木至一見のつしろ形　其角
白はしまふくやうもり角ゑ撓　嵐雪
ま一さいゆとのかるやつ〜山　去来
さーのそく窓人はく〜の日ゐ花　丈草

鶯

桃隣　智月　水花　幸茂　負室

芭蕉　其角　丈艸　去来　嵐雪　一桐

溪石　魚白　鉄枝　野坡　梅舌　心圭　桃隣　桐画　山川　夢々　一笑　惟然

猫の恋

うくひすや丸ふ鳴る声のひろ　宗因
うくひすあり梅の小枝よ養ひそ　鬼貫
黄鳥や園栖は翁の笛の身子　貞室

麦飯ふかんそ恋ふ猫とのけま　芭蕉
うき友にかまて猫のそらなるあ　去来
深窓の頼も猫つるやひさう猫　圃指
葉茶とくらそて猫のれんりふ　牛寂
巳ろ脊代そんふ心ありかしけ猫　秋色
なれも恋猫よ伽羅焼とうれろ　嵐雪
足跡を妻とふ猫とや雪の中　其角
誰猫とも朔ふ歳を編は数　沾徳

白魚

猫のときあふの見やたおそひ　琴風
うき恋ふたへとや猫の盗くひ　支考
のら猫やうかれゆくあと秋の中　文草
うき恋濃茶射ふのゆつけ猫　野徑

白魚ふ價ふそうそうみなま　芭蕉
ちふ魚や漁舟ふ歩ふ出ふあひるつら　其角
ちふ魚の餅ふるものふ水の泡　負薩
白魚の白きあひや秋のはし　之道
ちふうちや炙ふかふ佃しま　拙候
ふうをの骨や式紹う大江かま　荷兮
白魚や目まて公重貝ハ高魚　鬼貫

鳥の巣

巣をとらふるや世とる一下造化
巣かくるやおろまれしの者かくも
巣をとし〜るるや子ちらば狩ちを
多の巣ゐ夫年の多世を窓の声

昌房
之次
一雪
鬼貫

雀の子

人ゐ逃げ人ゐ別けり雀の子
鬼ちらふなるとてまもの子飼ふ和
荷鞍ふむ夫のとゝめや縁の先
日の影やこりくの上の狩すゝ色
嘶ゐや愛ゐ数ゐふゐ村ちゝゐ

鬼貫
河瓢
土芳
珠碩
宗因

百子鳥

幼もちいさ年の冠の百子鳥
玉子鳥都へ別ゐ和ゐ有
川上へ桁ゐ桁ゐり ちとて

鬼貫
岡白
其角

雉子

父母の去きりゐ雉子の聲
人ちとし雉子とゐもゐ犬の声
鶏の愛ゐ〜ゐ夕ちん雉子ゐ雉
何のをゐ母親を探ちゐ雉ゐの照
下塩の声きそあちん自部雉子
高声ゐ法〜とゐゐ雉ゐ和
おりゐ子と呼ゐゐ似ゐり雉子の声
行ゐ〜ゐ塩縄ゐゐ雉ゐ和
外ゐゐゐ雪間の雉子ゐみとり我
一夏ゐ三声ゐゐぬきゐゐ郎
ちゐゐや麦ゐゐ科ゐなゐきゐ
少〜ちのあゐ〜きや雉子の声

芭蕉
李角
夫来
文草
嵐雪
一雪
千那
塩車
撥土
衛門
言水
鬼貫

雲雀

雲雀より上ゆくとくふ峠の赤
あふのきて絵でうん詩の雲雀ふ
朝ことふはしゑをりふ面根のそら
逃こそ〜特とせけり夕ゑこそ
羽ゆらけとくへの雲ゆく雲雀
枝の木を定親ものる雲雀ふ雨
忘けらのせこりおとひこりゆ
ふもまこ障子ふる日を帝ゑふ
柴橋のふくふゆおちる雲雀ふ
口そ〜と雲ゆかけるひこりふ
郭虹やあふひふのちくらふさ
篭よ入をそ浦へある雲雀ふ

芭蕉
除風
文草
翠袖
滑橋
水花
其角
如泉
言水
梅盛
素堂
宗因

帰雁

そめふふも北へ帰雁の山路の角
あゆされやあふまかふふる雁
ゆく雁や初ゆをゆきの為かを
雁帰てりのふあちふや花の沉
小田久を鍬も柱やのこは雁
かふる丁筆を紙ふ数ひなり
立さわ〜今や紀の丁ゆせの雁
行丁ゆさふら下ふきけ〜よし
まてや雁をれて周防のねりけ瀬
ゆふと田螺ふらひてかふ雁
かふは丁留士の鋤田の砂ふ人
ふる雁田毎ゆ月の墨る夜ゆ

夏室
鬼貫
水哉
未山
其角
嵐雪
沉雄
凡峯
楓子
子英
長雅
蕪村

玄鳥

簾に入りて美人小刷ふ燕かな　嵐雪
義ふふ裏ハはをあのかひ反　凡兆
あそふともはとも去ふねとる代　去来
傘ハ祝ふらかさうよねとる　其角
はたふふの雁る同をや鳴まつと　丈草
芙蓉ハ立出されしはをあうれ　嵐蹄
いままことといふねをりの玄る代　俊似
燕や田をとりかへ馬のあと　野童
巣の中やヲを細うしてあや燕　峯嵐
かふふけもヲ彩ふものつをあう角　桐雨
土事引ふも休むはをあか那　舟竹
船綱ふゆふふ仲の乙るうれ　巴山

駒鳥

琴のねの巣ハこふふうはをあ我　枕舟
先傍のう炉炉ふる是ふ燕うる　合志
ふう紬ハあうふふ後るつをあう角　小春
こはるの去ハ仏合ふき白浪反　長虹
朝あけや人見ををあて弱るの明　捷花

鶯

鶯なふや赤襟うめと日影うは　閑指
樣ハふふくうをの去ふや吉野琴　三章
花の雪降ふをやうその琴の音　山只

麦鶉

麦蛸うきをとうとき保うはふ代　沾徒
ふふとなふ鶏ふ麦の夜明うを　風竹

蝶

蝶のとぶ野中の日影うれ　椎琴
しかる蝶ふるく　ふるとふるこゝを　其角
ふれ蝶と兒の人出と笑ひう　捫風
蝶の弄ある接ふる　彩　園指
とはりても　知らうく　萌蝶　栃
蝶のきて知とよ　紙けり　蒸のきて　手殘
初蝶もこんてあく　芥子の　二ふ紙　好春
かやくくの中紙出ふる　胡蝶　炊玉
枯芝や　若草ふるふ　紙　行こふ　百歳
笠蝶ーて　初ませいしき　胡蝶　雪窓
沖の蝶　汝さとまてを　紙ふり　我　戈磨
世の中やてふくしふれかくもあれ　宗因

蟲　蜂　蜆

蛇ふあたふ　蛇みくふひて　友そふ
この蛇紙ふ　ふとて　紙を　烟りふ
人もきて　長き日紙　ふれ　蛇の声
糸さふふ　蛇そーかふ　あじふる
蜂の巣や　留まて　紙ハ盗まれを
まふそーや　紙汲ふ　蜂の　往かへて
山吹ふ　紙ふらふて　ふたちの　声
ふたちの巣や　一間くーや　兄　身

野田村ふ　蜆　あそふり　蔡の　ふ
石一ふ　ふきふうれや　ふきふ　ふ
蜆ふふ　知けもふて　ねふ　ふの　れ
あふちふら　蜆ふふる　胡蝶ふる

芭蕉　其角　星泉　乙刈　杜洲　園風　沙鳥　蘭二　鬼貫　其角　蟲亭　好眞

蛙

古沈や蛙とびこむ水のおと　芭蕉
よしゝやさとの苔とりかくる　嵐雪
田の畦や虹と脊負くる帰く蛙　去来
ちんくさり蛙ふそめるうたこの角　其角
松風とうちこゝて笑く蛙の家　丈草
山の井や墨のさゝとふくむ蛙　杉風
まとうけて祈ふのるかくるる　工齋
きろくと我頭まりるこのくれる　嵐蘭
あろき沢もろくさうふ鳴かくれ　越人
ひらひふ蛙ひくるる海苔の家　仙化
尾を蔵くまと帰の人ぬ蛙の角　蚊豆
とまり江や火と焚舟ふるく蛙　戈磨

田螺

まとひのて蛍ものるかくるる角
かくら井戸へとひこゝるひ蛙くれ　宗瀘
蛍の道ふるれもさゝ出のかくる我　鬼貫
袖よこゝとらん田螺の海士のひるとこゝ　宗因
入彩る鯉も死ぬふ田ふゝから　芭蕉
里人の脚おとゝくる田ふゝ　丈草
行るの中ふまゝゝや田螺とり　嵐雅
景政ふ仁目ひろふたくゝ我　交泉
孫とものの蚕ゝ〜ふ日向この角　其角

蚕

蔑てもきて笑ゝてゝる蚕我　其角
くきもろと多るの羽かくゝ派蚕　知足
　　陽和

鮎

鮎の子は白魚おろるいうを　芭蕉
為鮎は精の一背ふ足ふねあり　支考
水流れ一網の目ふき小鮎ろ素　重政
鮎小の面魚の雫氏乳房この春　素堂

飯鮒

いひだとのかあいやゆれて果るけり　来山
飯鮒のおのれ豆ふ河内越　沾徳

落角

一の谷さやまるる鹿やおとし角　一夢
角おちて大とみまゝや庭の鹿　琴風
つの落し力やもつる若れ友　迚之
角おちて之日をうる男鹿ろ和　朱拙

佐保姫

さかひやり京ろうんへの寄の田　可理
佐保姫の法ふ見ゆ筆の海　如流

雉子

雉子ろ家初ふ法ふのおろん付　負徳
雉子ふ大和西月ふかさ水ま　鬼貫
待中の西月ろ雉ふ月　言水
ちとうあいまこきふ死の嵐ろ和　揚水

雉子ら

きさゝふ死の自夜ふ雉人業は苗　芭蕉
二月の雪とけておつるやとろも川　蕭山
きさゝふきれ雉ふ寄ゝき蝶の羽　之吹
きさゝらやゝ月ふ雉ふ雉と押灸　唯然
千那

弥生

淮陽もやよひの海の道千鳥　露沾
三月や雲はけしきは菜一下木　去来
さくらちる弥生五日八幡宮まゐ　其角
富士ふ流のて三月七日八日うま　信徳

左義長

左義長やことゝの相応帰帆　旭芳
左義長のそらゆもあとら鹿沈　幸以

霞

小泊瀬や眼流もしそのあら我　宗因
あふこゝゆもうつや湖ふ七去うたと　鬼貫
里かとむゆ人氏松のはうりかあ　野水
行くゝて程のかうふねうとみうね　霊交

花と少て杉人あとこむかとこの角　嵐雪
三帆舟上塩屋ふうるうたみうれ　其角
忍久見ふ白濃ゆやゝ夕かとこ　越人
流とうや尚こもゆうき石ふ霞　岩翁
破見海とき三うかゝる義うれ　子英
ゝこ茨てかうゝけ氏拾うとこ我　冰花
浦くゝの家ふ帆かうるゆとみうる　風洗
我宿もうとうりうれふ霞ふ家　月下
八重かとこ奥ゆとこうふ竜田沈　杜国

朧

唐崎の松を霧より朧かな　芭蕉
あのしさよ闇のあけくの朧　去来
大原や蝶の出て舞ふ朧月　丈草
朧月きこえぬ鐘の音ばかり　仙化
そば山や滝の音ばかり朧月　式之
中川やけうとんともあるは朧月　嵐雪
山めぐりやたりへよりて朧月　元峯
夕かすみとて朧とまちくらの　鼠弾
おぼろ夜と白酒うりのさとりうる　支考
朧夜は西のやうふ人猿の声　沾洲
たゆる自然を悲しむ朧月　支雪
朧くとりつくやうな滝のさし　鬼貫

凡巾

物の名は鮎や古郷のいろのほり　宗因
かつしかや江戸は凡巾の糸ぢる　其角
夕くれのりのうき雲やいろのあり　嵐雪
いろのほり西のあしるかたこそ　支雪
いろのあり山ものもとも　ちくし
やふいろやひとつはめるうらやさん　園風

薮入

薮入や浅草うけて芝の海　其角
やふいろやあるの自炊の酒は砕　琴風
薮入りや我炊ぐのしくあけぬ　専吟
やぶいりの麦や小豆の麦ばかり　尺
　　　　　　　　　　　　　　　　蕉村

餘寒

花もまだ埋火ぬくき餘寒かな

ひまなるまの徒おきし山さとの

傍ふの勝ぬさとまの餘寒かな

羅の戸は火鉢ちひさき餘寒かな

燒返

雷やひとむらさめのさえかへれ

さえさえかのことあてめるる

る帝て燒野のあられまるれ

ぬ曲くと燒飛ひ早きひとひ

山るとと小松の残るゆけ野かな

燒野

定義　其角

野童　芭村

夫来　桃盛

乱糸　曲之

下木

雪間

うき中ゆれて雪間のよもぎかな

光陰の矢間あひる春風の春

草莖を色ひ蕗もなれ雪ゆ春

酔さまて若菜摘ふき雪間ぬ

木枕の垢や伊吹ふのるゆき

かきを消て富士を裸ま春飽より

残雪

雪残る畠獄さむき泳生ゑ春

舟くの小松ふ雪の残てけり

軒の雪盗人あゑの取のとー

徐ふ東風ゑる雲のいきうれ

暖簾ふ東風ふくつせの出店ぬ

東風

さて　兼次

兼角　甚角

万子　丈草

甚角　含吟

旦兼　貝堂

去来　蕪村

春風

春風や人声しつの駅三笠山　芭蕉

春風ことことゝ雛の駕籠の前　蕪子

春風せゝなきもさゝなね羽織哉　亀翁

春風や堤こしなるうゝ打声　去来

春風の法師か旅や春の風　孝山

雪解

北国の貴族見まる書消哉　孝村

雪消て大声あるる小ちゝ有　泊徳

松の雪きえゝや声をあげん山　樵隣

雪しるや蛤いろをあれのもと　春湖

きゆる時い氷も消きえはるり　木白

氷消て風ふむられそ路通

春雨

不性ちやかきもとさゝ春の雨　芭蕉

春雨やあるゝ田義の古の鯨　史邦

春雨やあるゝ軒ふなくさ色　羽紅

はるさめや山より出る雲の門　孤雖

春雨や何ちらいん嵯山茶庵　丈草

春雨のこゝ呼ふ馬のけあけ哉　堤亭

春雨ふ九ッあまる松の南　秋色

春雨ちゝ我ゝまゝひの行所　狂舟

はるさめや初きものゝ枯つゝ　其角

春雨や枕ゝ行くうゝ本　支考

春雨や江戸も薄ちり春の夜　恵貫

春雨や為ち川人はゝ後ちり　貞室

春雪

酒色すこしわれてゆきけり　来山
淡雪や両ふあらはれ出る　風麥
ふるけはとことゝへ初と春の雪　亘重
下苔の氣色をけさや春のゆき　李由

春日

かゝる山や佳るゝ川は春日うれ　負室
春の日や塵ふ花の袖ふるゝ　鬼貫
如意輪や鳥もかゝとる春日哉　其角
紙袴も春日ふめくむ石のめや　沾德

春夜

春の夜や草洲を鞭の巻たり　其角
春は狩よ尊死ロ西を守る家　蕪村

春海

青海や白鷺ゆくまろ夏のこゑ　素堂
花ちる行遠山雲や春は海　芳川
松ちるや旭こゑゆくさ松の陽　不卜

春の月

夏の月琴ふ物かくてゝめくれ　其角
鹿うくうゝ雄岩なりけり春の月　沾徳
春月や市金堂の木は間より　蕪村

春暮

鐘ちるねさゝゝ伽ちろ夏の暮　芭蕉
立義て淋しかゝ世ん春のくれ　普船
赤猫のうゝさくなりね夏のくれ　山店
花や根ふさゝはくゝの春の暮　負室

春の野

杉風　羽紅　負室

春はるる

嵐雪　其角　泊徒

水ぬるむ

阿波　文水　峡水　抱月

海雲

海苔　寒食　粥

海苔とは老の寿もせて　芭蕉
海苔とくく水の名ふとも　其角
人のもふかくれてのちや　杉峯
まきのりやらしをふにこん　尺草
磯訓雲　桐雨
寒食のさとこもひしけふそあひ　氷花
ひものの火も寒食の日ハ腹立そ　月下
寒食や旅人の雪の路きえと　其角
今宵とそ家ハ自身安　芭蕉
雨の夕ハ雁とさとるや草の餅　政玄
伊吹山雲の移る間ハそ　埋然
粥やくハさ〜きも世の白し

陽炎

枯芝やまことうるるふの一二すじ　芭蕉
うけるふの抱付いてうるるる角　越人
かるるふや巖おこしはうけらら　配力
陽炎や見られもつく夜り駕　去来
うけるるるるさし矢の沉む井中北　山川
ひるるるふの昼して炉中のきさるれ　達暑
陽炎ふ隣の茶さんとるるふ釜屏風　丈艸
うけるるるふや障子かるるるふ釜屏風　普船
陽炎や小磯の沙もふきこそそ　甚角
ひけるるふは夕日にいるたはるるり我　舟泉

糸遊　二日灸　午

糸ゆふはむしとひはけるるけるふ我　芭蕉
はるるとと糸遊やきのむきそれふ且　支雪
ひと遊やあるるき簾の人はるる　乙州
糸ゆふやはをめひし体縒む須　冰花
ひと移ふやたり人えるるさけの烟　鋤雲
小窓照る去の日ら且一二日灸　その
二日灸花ふるひのち丈ふなり　几董
初午やさん銭よみハ芝居ふら　甚角
ふ川午やあれせんつはるるひと　支考
はるひはるるや鍵をるるるるれ戸雨　野坡
初むまや稚ふまれたるるるつみ　川支

彼岸御忌

なん午やほとゝぎすに霞む通り命　立圃
初午や妻の影ふむ素浪人　沾徳
なん月午や役の行者はなれ路次　壺月
初午やその家くの袖さゝみ　蕉村
精進ときとのそれ一祝の日岸うち　来山
彼岸ふくひうん橋のちりぬまり　彫棠
波一ぬ武士ハたゝ寄る彼岸代　甚角
橋さくひとゝぬ弥陀のゑんかゝ　支考
法忌まつり都ぬ錦珠数袋　言水
御忌の鐘ゆゝくや谷の氷まく　芝村
日ぬ霞月ぬ氷ゝやは忌の鐘　几董

涅槃

神垣やむりなもかけき涅槃像　芭蕉
さるほとゝぎ千ゝぬ物ゝそゝ佛　宗因
孫子ぬハたゝ寄まて寄ゝ祇ゝ我　荻子
きゝゝゝゝの日ぬもまゝや十五日　鬼貫
ゝのむしや常のゝりぬく涅槃像　野水
ねゝん金ゝはゝゝゝ赤ゝ日の光　言水
天人も泣新ゝゝ祇ゝゝ像　巳百
鈴蘭の大夢あゝれ涅槃像　希因

西行忌

西行の死出路を旅のはしゝゝ　其角
西行よ彼岸さゝゝゝ生しゝゝる　杜若

永き日

芭蕉　元峯　許六　宗因　鬼貫　道春

雲おそき四谷をたけり春永後
永き日は遠近人となりぬよや
戦法のなかを見るこそ長き
日さしはへまるる迷き瀬田の橋
永き日や遊び書しり大津る
なるを日や子ふにめいてタ
ゝと

出代

嵐雪　知足　浮洋　幽山　蓼言　蕭山

出かせるやその門よ雛辰の市
お暇や照日の下結をとりて行
出るりの間やめそふ花のとを
出かせるり中はこの消り遊女の果
お暇りやあれのなるとをかちは者
出るりふ図司王たの鳥幾沈

雛

其角　木導　蓋村

出かりりや人おくせりる連元ら
お暇ふかるりや繁のゆくて紙
出るりやるるるくと古菖蒲
草の戸もそみかるる代を雛の家
旅ゝきてのそふや雛のあとを
とゝろめるや郎のひるふ夫婦連
隣ゝ雛えまろ小家ゝ奈
ゝとりて移ひるさりゝ雛の戸

芭蕉　車来　鬼貫　嵐雪　其角　達暑　霜白　ゝく

夫婦雛むとえのとゝ山ゝせん
劫ゝ代りのとひなりゝふの雛
山崎の櫃ゝくこよ山る遊び

鶏合

汐干

笠下　其角
言水　君里

鶏合中よりは雞のあそびかな　其角
あやとりは獅子ふそろふく逆毛哉　言水
勝鶏の世を若元抱き寄り　君里
赤いのゝ五位は上ゝとり合

汐干

鬼貫　嵐雪

鬼貫
蜆あらむ比目を踏んちぼ干うれ
汐干られて蟹ゝ裾引なとりかれ
人ゝとむ舟と陸とゝの汐干うれ
所川ゝ富士のかけなる汐干哉
きを浮ゝゝゝの汐干や田植ゝ
帯ゝとゝ川はゝゝちぼ干哉
蜑籠ゝて浮ゝ人のゝ汐干うれ
仲ゝゝゝ足あとはゝる汐干かな

嵐雪
其角
希因
大魚

其角
嵐雪
友重
圃指
介我
治徒
如泉
桃女

馬刀

曲水

畑打

一の洲へ都の客と馬刀とりふ
ゝ蓬の馬刀うきよせん筆の靴
曲ゝや見ゝゝゝゝゝゝゝゝは
曲水や岩ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ山路この角
畠ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ嵐のさゝゝ麻
ちゝゝゝゝゝゝ畑打ゝゝゝゝゝ風
畠打や傍ゝ雁はゝゝゝゝゝゝ
畑ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ打ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
畑ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

芭蕉
野風
路茨
茗村
秋之坊
乃雪

長閑

人の世や長閑なる日の寺林　其角

肩身い貧世ふるりぬ冬閑し　冬文

のどかさを物もむりつね朝霞　杜國

長閑さや空ふらくもるの声　雨什

別霜

ふく病みつれなき霜の別こゝの京　千那

初夜後夜の鐘つたなしいろは霜　松吟

峰入

峯入や一里むらゐ小山伏　芭蕉

うゐ入れ花踏て切素足う有　六亀

峯入や雲ふ起卧とき人もあり　重頼

行夏

行夏や雲の帝鳥の日をうみて　芭蕉

ゆくるや猪ゐを雄鳥のいとれ貝　其角

明ぬ間ハ星も嵐もてるはりち　丈草

行るふ底のゆけうる桂う有　支考

うちるうね名を切春や親ちゝと　暮四

切春ふ頻忍なほかうゆう京　湖春

ゆくるも仏沼敵の野守う形　野水

行はるや年一さるふ長く鐘の声　山川

ゆく夏の夜を移ね敵の離うら　鬼貫

行夏や横河へのるらゐの神　芸村

古人續五百題發句集

時鳥

夏之部

うとゝぎすの聞うるはわるくもきゝたくはなくく水鬱ふなるゝ人郭公　守武

ほとゝぎす大仏殿をもる月夜　宗鑑

夜の涼とりもち白〳〵本ゝきゝたなるゝふきゝ人多くいるゝ子規　芭蕉

たもとれぬ聲ぶつるゝもうるとゝぎすを　鬼貫

蜀魂よりみち淀の水ゝるゝ　貞室

一幽

在明のおりてあとをやとしなのと
御成敗いうなほきちを子規
ほとゝぎすを神楽の中を通りて
就を谷ふかい小のれほとゝぎす
法けるきふ帰け郭公〳〵
附るその日〳〵のそろ稲う有
杜宇とぬ夜かをとくかゝら光
うゝれ出て山久をれゝ蜀魂
とゝぎすとゝ■ゝみやとの子規
馬とうゝとうゝの合りをとゝをを
ゝふりゝかうゝゝきほとゝきと
敗恋ゝとき森さあうつゝ時名

其角
嵐雪
安札
正由
利冬
尚白
宗因
去来
丈草
鈍可
傘下
一鼓

ほとゝきとゝれゝふゆゝむ野の虎さ
あゝ一子の口をの血ををゝ郭公
目あゝ青紫山やとゝきゝをゝ鰹
ほとゝきゝ一声ゝ〳〵ほ霍の声
石昔の朝霧かゝ〳〵本とゝきゝ
四五月のうゝゝさ涙や郭公
ゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
松高や陸ゝ水をれほとゝきゝ
星ゝゝ門帰うゝゝ蜀魂
杜宇なゝ稲ゝゝゝ月夜ゝな
湖をとゝてかゝとゝゝゝとゝゝ
ゝほほゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ子規

柳風
松下
素堂
杉風
惟然
詩六
卯七
曽良
囲友
朱拙
拙先
智月

左羽の山おぼぬけ　ほとゝぎす
郭公　なつかぬ　おもかげ　朝霧の
雨の間を　鳴ふなり　ほとゝぎす
附　ほとゝぎす　なつかぬ　ほとゝぎす
ありしこむ　森をあらしよ　郭公
鳴　うつ人　まもなくくるゝ　ほとゝぎす
附　鳥　窓　ほとゝぎす　人　ほとゝぎす
青　ほとゝぎす　舟　ほとゝぎす　ほとゝぎす
高　ほとゝぎす　ほとゝぎす　中の　杜宇

野坡　支考　風國　荷兮　北枝　正秀　土芳　素堂　洒堂

閑古鳥

鳴出して　ほとゝぎす　口を　ほとゝぎす　ねかむ　ほとゝぎす
谷こしや　空　ほとゝぎす　風の　ほとゝぎす
閑古鳥の　声　ほとゝぎす　脉　ほとゝぎす　山　ほとゝぎす
なつかし　ほとゝぎす　鳴　ほとゝぎす　かんこどり
風　ほとゝぎす　ほとゝぎす　森の　ほとゝぎす　閑古鳥
植　ほとゝぎす　ほとゝぎす　山田　ほとゝぎす　青　ほとゝぎす　宗古
かんこ　ほとゝぎす　鳴　ほとゝぎす　蛙の　ほとゝぎす　目　ほとゝぎす
草　ほとゝぎす　臥　ほとゝぎす　芝　ほとゝぎす　稲　ほとゝぎす　閑古　ほとゝぎす

山中　ほとゝぎす　やう　ほとゝぎす　稲　ほとゝぎす　ほとゝぎす　小六ふし
口　ほとゝぎす　似　ほとゝぎす　ほとゝぎす　の　ほとゝぎす　ほとゝぎす　こと

鈞壺　乙州　鬼貫　甲斐　其角　舟竹　洒堂　正秀　支考　宗因

蛍の音を入

うらびたる音を入あやつ二ッ星　嵐雪
蛍や音を帰こんと昔叫　田水

蔭雀

よし鳥や日のさし廻る仮の庵　錦水
よしきりも小野とはらばし蔭の中　行雪
紙ゑ〜の祝ひし我をきゝすまし　芭蕉

翡翠

河せみの影とよ森てゆ蓮の羽　集言
翡翠に折りけ竈の支森の系　酉花

羽抜鶏

羽ぬけ鶏常音えうたいこと崎　其角
そこらもの枕えてゆるや羽ぬけ鶏　希因

鵜

たゝね鵜のわなゝゆゆ舟うれ
鵜とゝもゝとゝ鵜ゝ水をゝゝと行
見物の火ゆえゝれゝる寄り鵜ゝる
襲至もゝら鵜はゝゝや川おゝ
曲江ゝ舟のゝゝゝゝ鵜ゝ祝ゝ有
先舟の祝ゝもかゝゝゝゝ鵜ゝ舟ゝ系
鵜はゝゝひの尺ゝゝゝゝゝゝゝゝ
鵜縄ゝゝ淡ゝゝゝゝゝゝゝゝ
嘴数ゝ早瀬とみゝる鵜ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ鵜ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ鵜ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

其角　鬼貫　去来　李田　梅舗　淳兒　独卜　桃隣　圃指　琴風　氷花　尚白

水雞

塚をきてあまりかなしむ水鷄なおのゝ絲の尾や長鳴て蟹の園

寒寺の宿をとゝもるゝ間をうのはなかとのもちちく叫る水雞哉

芭蕉

うゝ鳴より戻りかゝとゝる鷄我去来

霄の口喘ゝく曇るや鷄ゝひる半残

北枝

水札

水札啼て日新ちろはく流ゝの角一泉

けゝるゝて神杉ときゝるゝ乙尚白

うちゝ川や啼の深巣ふなく蛙其角

鴨の巣

亀の脊ふたゝまゝ啼の深巣ゝ鴨肖山

鴨肖巣に麦蒔かゝと小西ゝ一桃

螢

おのゝ火を木ゝの螢や花の中芭蕉

ゝる火や吹ゝとゝされて啼の園去来

義はゝて朝ゝくふゝる螢ゝ有嵐雪

牛部ゝ乙ゝ乙ゝ草のはゝる火言水

はゝゝとむ螢のゝゝや谷のゝ夫草

相のゝゝみ息さゝゝねる乙螢史邦

草ゝ木も螢ゝゝゝゝゝの音正秀

田の畦は豆はゝひはゝるゝ万乎

かゝゝゝゝを生れつきゝ螢ゝ紫猿雖

ゝ汲てゝれゝ袖のゝるゝ角啼歩

あゝの夜ゝ下ゝゝりゝ螢ゝ紫含帖

夕闇ゝはゝるゝゝゝゝ酒ゝゝし水鳴

蝙蝠

水辺を飛ぶ蝙蝠や郭公　宗因
藪垣や卒都婆のあしを飛蝙蝠　鬼貫
石山へ夕ぐれ〳〵きわうかう角　嘉充
飛くれ鼎ちらふなる蝙蝠　袁友
蝙蝠や宇治の晒ようとくりて　其角
たゝ長〳〵夕くれはりふさ〳〵と風　子英
かゝるやうの向ひの女房こちをゝる　芝村
蝙蝠や自はあうりを立さぶる　曉臺

羽蟻

羽蟻とぶや冨士の裾野の小家より　芝村
とんでこゝを近道とする羽蟻　秋

蛙

明松ふるあり樹ゆなくなるかゝ侍　芭蕉
あまかゝる桁を落く蛙もあり　其糟
ふう帝とあるふるあり蛙　涼岱

亀

ひきをふんで夜の明ぬ亀を見　其角
憂き附ぬ亀の遠寄も雨夜哉　晉良

ひき蛙

子子や流〳〵ゑのうのとまく　氷花
ほうふりのうくや浮世のうのせ貝　重厚

子子

蚕ちゝみ馬の尿をゝ注ぐゝ元　芭蕉
隙あきや蚕の出く行耳の穴　丈艸
川越や蚕ふつうほく樓田川　影棠

蚕

蠅

夏

うゑ人の旅ふもなつ人木方の蠅　芭蕉
かほ丶はく飯粒そ人ゐあつ人ゐり　嵐雪
蠅ゐいる眼ゐ力なゑ初る森ゐ初　子堂
珠数くりて蠅打人の片手ゐ　西軒
浦風やゆふ立ゐ人の手ゐ見　岱水
ゑ人ゑ打ゑの手枕の初ゐりこの系　已百
うゑ丶きま丶子の点ゐ蠅ゐ丶人　紅雪
苦丶ゐ丶無系ゐり行午の蠅　ゑ節

電のさ丶ゑ出丶丶や火ゐりゐ丶
あふ夜ゐや鳥ゐ丶ゐ子ゐ火取虫　丈草
夕ゑゐとまりて丶ゐゐゐ火ゐり虫　翠柚
正秀

蚊

夏

蚊柱

宵の蚊ゐ法ゐ丶ゐ丶ゐる八声ゐ初
蚊をちけて祝の鼠やほゐ丶きを　甚角
旅人やあゐ川きゐの蚊ゐゆ人　鬼賀
血をゐけ丶りのとゐゐを蚊の脛を　治荷
蚊の群ゐ丶柳の一木の墨ゐり　丈草
子やゐゐんその子ゐ母も蚊の食ん　小春
蚊の伊せゐ丶鎧のゐ人ゐとまりけり　嵐紫
蚊やの蚊や御佛供禁ゐゐ生ゐ丶行　一笑
蚊をゐゐを中ゐ安明ゐ旅森ゐな　鈎雪
蚊柱ゐ大鋸屑誘ゐ夕部ゐ角　昌碧
蚊ゐ丶ゐゐ夢の涼樹ゐ丶ゐゐり　宗因
甚角

蚊遣り

蓬蒸して香ばしき草の故事より我
故郷の家や斧を女の石臼うり
蚊遣火ふる深とろろけまくなりあること
ろより火や蚊遣焚る方に老ひとり
指ろひし蚊も出ずうちの故事より
草の戸を念佛の中もうすりれ

去来
嵐雪
杏雨
其角
鈍子
三翁

牛

蝸牛角ふりたてよ須磨明石
袖把の蝸牛をとるに角なきと蝸牛
世ふにれて踏ふみるべかとはふり
ちろ露や角に目をのうちたてる
牛角ふく笹の葉ふる那
我むし踏ふしたるかとはふり

芭蕉
其角
太元
嵐雪
水鶴
鬼貫

蟬

撞鐘も動くやうなり蟬の声
蟬の声ふ武家の夕食ふるなり
ゆとりてよ軍捨松ふせこの声
ふく蟬のその木ふもまこと居つるぬる
捕もうとくやうなりせみのふる
せこ常や麦をうりあとこ三
啞蟬のなるね梢もめの見形
月しろふ夢ふて飛ふ蟬のこる
せみなくや金ふて眠る松の下
吹あること風ふたるもむや蟬ふ夜
蟬なくや市織窓の昏付ふ

芭蕉
釣雪
宗因
鬼貫
昌碧
嵐雪
杉風
正秀
可吟
如行
曉烏

空蟬

鬼灯のからをこぼるゝや蟬のから　其角

空せみや石の鳥居を帝捨し　一井

蟬のかゞはるゝまでて長なり　句空

目の玉をうつて出るや蟬のから　卧高

鹿の子

破垣やうきと鹿子のかゝり路　曾良

ちらしき角ふなるきし鹿子哉　捌雪

鹿の子や寐ぬ出まゝ青草　野坡

更衣

一ッ脱てうしろ向むねうもかな　芭蕉

はふるこもりのやそや花の更衣　正式

春と夏とまさゆきふ衣こゝ　鬼貫

寐る夏もかりのゆとりや更衣　宗因

すゝの出く布子賣をしとゝもかな　杜國

扇屋の暖簾ちらしもかな　嵐外

ちらもゝ人をんなもちふね罪深し　その

罩ふるしいまゝ嫁なほ衣こゝ　一有

更衣襖ものをゝをやたゝみ　傘下

てらゝゝとかゝるもほゝよ衣こゝへ　野坡

雲水ふ打ぬとゝやゝ衣こゝ　秋之坊

とゝもゝ人をゝゝ扉風越ぬし　琴風

ゝゝん著をを殺もゝゝや更衣　亀翁

牙をなゝゝ涼さゝむかふゝもゝ　且水

綿をぬく旅寐ゝせしゝゝもゝ更　九郎

ゝゝゝ子やゝの衣ゝ面ゝ衣かへ　尚白

稻

嵐雪　鬼貫　國友　独卜　此筋　湖水　素行

青簾

月下　吟松　支治　希因

葵祭

挑後　支考　撈良　曉臺　定角　定克　白雲　玉芙　新美　古庭

生洲

卯月

もりの山をは木芽や四月の橋うり　芭蕉
此ところの耶著月ふる所月うれ　尚白
白雲のくるや四月のすゝの山　炫外
山城や卯月くりの雑子のこゑ　錢芦

皐月

たまゝふる日月ゝ五月この角　去来
かゝる月を秋のせむる五月哉　凡兆

水無月

六月や風ふる所きこゑ人　鬼貫
こゑる月やうゝ流ゝ年ゝ　素堂
ゝ世ゝ月や指ゝゝの風ゆるき　杉風
みな月や朝起ゝゝる大書院　惟然
六月や蟻ふ聖ゝ法ゝ空ゝ　怒風

夏菊

名ゝ佛ゝゝ月のゝゝの夏菊ゝ　重則
菊法ゝみや先ゆく人ゝ児のゝ　言水

夏書

日記ゝゝかゝゝゝる筆の夏書ゝ　蕪村
法ゝゝゝゝ夏出のふゝは命ゝ系　几董

灌佛

灌佛や雛子合ゝる歓陳の香　芭蕉
灌仏や茶ゝゝゝけも二年紙　之道
灌佛のゝのゝゝ清ゝゝゝゝね　尚白
灌仏やゝゝ入相乃大ほゝゝけ　百里
灌佛やはゝし並ゝる井ゝの玉根　曲翠

花見堂

七堂ふ[illegible]人余ほや花見堂　麥林

脫捨て夏の住居や花見堂　京邨

蹴つて軒をめぐりやさる見堂　分江

新茶

はみてる秘をかくして新茶こる　考逸

起くのとく後ず宿の新茶こる　舍羅

葉擬

樹の戸をうのふせ[illegible]く葉擬　嵐竹

大敷はいろ[illegible]かくを葉擬の葉　史邦

扶蘇のさり蹈ありくを[illegible]　山店

風呂

夏風呂や清水寺とかれこり　宗因

風呂の茶は夏目もうに細こうれ　東房

短夜

みじろ夜やかの五文字小州石浮　宗因

みじろ歩ず二階へとしる上り吉アヒ　来山

短歩ず吉ゆ冠者に各綾こる　其角

みじろ夜や木賃もあるとをとをビ　惟然

みじろよやまこと白粉の香ハのとり　一雫

みじろ歩ハ藤さあの里も朝庶れ　千瓢

短夜の声なま長し馬ゆくふ　清門

みじろ歩や百合咲うけく明あり　林陰

なんの夜やるる火ゆ藁ゆ里　且菓

みじろ歩くあるしゆ角や張の爰　青霄

みじろ夜や小見世明るる町とろ丑　芝村

麦

行駒の麦ふなくさむやとりうゑ　芭蕉
はをみ合ふ子供のうけや麦そうけ　游力
地あるくやさとろふ足も麥の秋　此筋
家のむ絃の麦や穂ふ出ぬ夕日新　丈草
一佛とれや鳥羽田のことくひき　之道
麦うりや内外もなし志賀の里　重五
あけ土よりの稗とく麦一穂　玄察
むふ雨ふ牛ものとる麦野うゑ　枳風

蕎麦・日のけふもろ和さうけ畑　鈎雪
小角豆畑妹ろ畑根ふあるてふまり　心棘
ふれてふ麦下に蕎のなれさうけ我　亀翁

小角豆

かりを

鮠

かりを賣りいろなる人を酔そうん　芭蕉
二の富ハ鄰へもちて初かりを　沾洲
下部名ふかりを食とる日や佛　嵐雪
麦出るを鮠よりて食ふ山家うな　花紅
うををまハせうなれあや下ひせひ　百里
漕はけて峯の左りふかりをこり肌　紫紅
なるふひても先達新やこう門鰹　岩翁
やあ志はふく夕をのかゆ沢鰹汚　宗因

鮠捕やなれをとりうを後のうを　宗因
格上ふ鮠をひふくや毎の法ゆ　秋吉
ふふ見てもなるなるや鮠の鮎　負頼

蠅

去来
鬼貫
車来
曲翠
岩翁

幟

其角
宗因
文鱗
百里
芦本

青柴を蚊遣もたるや八瀬大原
嵐こそや　松よかやはふ昆陽沈
らさそ　蓬をあらく入れり　蠅の中
蚊の声ふのれさましてかや　ゆとく
老せ身のさそみ西や蚊遣のそは
花あやめのほりもかをる嵐うな
うりさりやそや　帝書紙幟
雲ちとよ麦の穂ふとそ帝のそり
左右さふ横雲ふそ北ちりうる
茶ひしろの中ふ立る岳のそを

粽

菖蒲湯

鬼貫
西吟
路通
蓬雨
ちく
玉芙
竜尺
甫盛

荷兮
来山

葦原や豊の粽は國津風
上ふ　ふけみや粽のそとそ　そう
ふそやくふ粽とふなり　ゆとしき中
下さまふ初物そやし　柏ちそそ
山笠のゆひ　ちそ　ちそ　竜
物さしく粽を切りやお乳六り
鎗りちりはちふ出ふ　粽ふ有
揚ふふ鼻あちらひくちそそ我
ちそふ入る湯ふりふ　ちり一盥
ちふ紙よやりふの浴ふ数ふ迷る

印地うち

子ふ似る子のかうとや市地打
なそしこの嵐を印地かうらうは
年ふるき人のとはしや市地可

仙化
志
溪石

競馬

競馬皆ふ入身のいきみ〻う那
人の世もかうしけしらく人る
競る持ふ分ふこいふこと云なし
唐人ふ一度こせこそ競馬うは
けのそこそこ房りふ陣の斷うな

其角
山川
士芝
草士
朱紬

竹酔日

西雲や竹も酔日の人あつあ
竹うるやふふふりせる茶碗酒

其角
野坡

五月雨

きみこれふかくをはりのや蛭田の稿
五月雨や蛭剛のとはこ鍋の底
さみだれ雨雨降りのとおもえろう
五月雨ふ洗ものや紀伊の八社司
はこそれたく武蔵野の秋俳こ
五月雨こ堤や三ヶ一天の川
こうこをこの何を業ふ級渡の人
五月雨ふ柳きこうまれ行こう業
牛もなし毛の羽のあこうは五月雨
海山ときみこれこうや一下こうみ
かはこのふ田子のりこをや五月雨
五月雨や柱日ふ出こ市の家

芭蕉
嵐雪
鬼貫
去来
宗因
望一
鞭石
龍一
賢
凡兆
其角
松芳

入梅

五月雨の名や淀川 大井川　桃隣
頭をさけて馬もあゆまや五月雨　前口
けみとれる持あるるるるるこころの　里東

夕立のかしらへはしりる角
宮崎や宮さて雲を入梅あるる　丈草
双六の相手呼ひこむはしりかな　養法
胴亀特夜雲を起をはしり我　胡及
松風や入梅ふる日の夏曇り　銭芝
　　文丸

虎の夏

虎の紬をそよめ多ふ降る涼　鬼貫
降りの中ふる紀名や虎の雨　一声

五月闇

五月闇多雖さなし人の家　舟泉
たそくしし峯ふ結そく五月闇　探志
さりもそみ桃の虫をもたらへ名　秋下

夏の日

夏の日ふ嬉き飴の中う那　嵐雪
なるの日や生日そく死そよみ夏ふ　文里
夏ぬ日を事とも陽田の名のまこ　鬼貫

夏ぬ月

蝿壺やそろ形ふ夢をなるの月　芭蕉
明くのく家ふ伏見や夏の月　嵐雪
るるの秋や東ハなるも月を西　宗因
城下や笛きそあくるの月　露白
たふれそ体酒もさえそ夏ぬ月　桃隣

夏野

馬はく〳〵我と絶ふる夏野かな　芭蕉

枯草を麦くるとふ夏野かな　生林

掃ふとも音や夏野のきりぎすを　元淮

いろつちの荒くなさるる夏野哉　史邦

なつの山

なつの山やくも井ふほとる雲の新　支考

花をしむけふ夏山の紫ゆふ　鬼貫

なつ山を霞ふの枕屏風哉　宗因

雲雀帰くめと物さとし夏の山　掛高

火串

うつ田木の鬼ふおそれそとり給　宝角

照射ふ倉佛の上を透ひきり　秋風

蝮ふ斬やかうと生りやは　露伯

やなぎ

投られそとりうき命や柳の魚　此筋

目通りのをりの腹や柳さうし　其角

田植

牛ちゝほ声もるゝき田植うた　賓車

渺〳〵と尻ふるゝ田植うた　曲水

板なりふせりあり〳〵ふ田植哉　丈草

青蛙やせうんまりむる田植唄　正秀

沖〳〵と笛をのまめる田植哉　示峰

蔵の家ふ亀おさへる田うゑ哉　立竜

山吹も巴も出る田うゑ那　許六

菅笠のわを腰よりそ田植唄　笛吟

白ゐれ声ふ尾のある田植哉　鬼貫

風流のをしめや奥の田植唄　芭蕉

早乙女

早乙女よかへく取るる菜飯哉　嵐雪
老ぬるも早乙女なる市田哉　景道
早乙女の手てせくのの川は支　彫棠
明る戸や早乙女姿ゆる其隣　百里

苗

西の東さまん早苗ゆも風は青　芭蕉
菩薩とおもふ苗や屋の海り苗　乙州
燕の下腹さらはさるへこの那　胡布
ゆゆうけや物ゆきさるこま苗を　冬市
ふるる舟の植むれこは早苗哉　魚白
頂れる捧代入けり苗うち　琴風
ところく雲ある谷の早苗れ　紅介

青田

里の子ら燕掠るさるへこの青　支考
親は日ハ寺へ助こは苗ら船　臥菖
谷風や青田を廻る菴の客　丈草
畔豆もうもゆ洞ふ青田ろな　楚舟
ぬれ髪ふるるる門の青田ろ羽　汀鶴
桑帷てあともさらるる青田哉　挑隣
孫〜さや八人代の田はあをみ　荒雀
橋の小高の崎も青田ろな　知足
ぬき橋や田草もちねそろ水　山店
田のくさはおくれくて富士霞　奚魚

扇子

稽合ふ十二の骨のあふぎの那
ゑをさしゐ旅の跡えむ扇うれ
さらけまゆ扇ぶうけてまう涼し
いてきて饅頭おりきめのき我
扇折手ゐをつ〜き化粧ろ京
小秋ふけく肌のはあるぎ扇うる

宗武
宗因
大艸
草士
尚白
泉門

紙扇

あふけく〜のつくう王地ゐ兵図
青丹よし白紙うちつもなくく姿
ムはゐあふうちいのふさの白八れ
かりきより男ゐほまはうちいかゐ
俗紙ふうちふさし出る物ろ京

宗因
来山
其角
去志
一蜂

紙帳

夜ゐ中寝ん紙帳ゐ助成入ゐ音
改ゐ入ろ見ゐ入ハかくろふ紙帳ろゐ
おりふとと帷帳ふうりと送りろと

其角
貞長
野徑

帷子

かこもちの四五六月のさんみう有
帷子ゐあうはりまろ日出ろ那
ろ紅ふや佐保と龍田の宮ゐ姫

宗鑑
丈草
青峨

祇園会

祇園会の山路ゐ入ろや大徒誉
ゐつとゐや山ゐ木はゐる祇園の会
祇園會や祢のまふく〜手向山
去白もろも踊ろやきをんの會

宗因
梅盛
如貞
嵐雪

氷室

水の奥氷室こゝ川なる柳この那
ちりはあて千年あれる氷室山
ありこゝや家ふ冷水ふかもち

芭蕉

雲の峰

湖や暑ををしむ人もの水松

負室

雲の峯なんか嵐ふくもしても
夕ゝ絶やか瓜ふくひこふ雲の嶺

溪石

くもの峯空ふこ絶のりやはれぬ

雨乞

柴刈こくゝるこも志ふ花麦の畑
雲の峯聽うけ不ゝ鳴くむなり刑

芭蕉

雨乞ふ先ちこゝやゆゝ麦かを
あまをや近江となりし川の敷

鬼貫

去来

桐雨

明水

野径

丈草

乙州

昼寝

山人の昼寝をちこ夏蔦かたら
かこひふの洗濯ま人ふ刻る蔭こ
ゆ〜〜ふ額ちさゆる昼寝こ那

挑妖

昨非

当仰

土用

白雲の天は原学土用こ那
寒ま晒〜土用の中ふ立こ家

望一

許六

虫干

捨人や木草にかこを土用干
ありかこ死時代こ達や古用ふし
ちたり香や虫干もせ〜ふ人ちの
内張の浅はあ〜ちや土用ほ〜
虫ほ〜やせ〜て奥あれ清ふる

其角

杉風

ちく

理性軒

甫山

暑

あつき日は海に入るべし 最上川

焼豆腐うりてあつき夕日哉 芭蕉

墓の二基ふうふあれあつき哉 宗因

そば庭の砂あつくぬくりさる哉 去来

あつかんこい数ふく風もあつし哉 荷兮

なんとかふの暑さと石の壁もあつ 野童

照付て知らぬもあつし海のうへ 鬼貫

妻もあり子もあり宿のあつさ哉 嵐雪

乙鳥とぶ二丁と臭のあつはかな 氷花

死山はちらちらもえるあつさ哉 許六

粉ぬかなれ蛆もあるの暑さ哉 猿雖

馬の目はもえるあつさ暑さ哉 里東

蛟童

あつき砂に雀足もあつさの邪

田の草はあつあつ哉あつさ哉

蝉なくてうつ人駕もなしあつさ哉

年寄と晩田の稲は暑の邪

並松を見うけて町のあつさか角

草のあやめあつさ哉月は取うつそ

名菖の内のあつさや棒はなし

積あげて暑しやまをあつ哉

まつ日は朝寒ふちとぬあつさかな

空いろは水てあるうちのつはう邪

村西の木蔭とあるあつさ哉

あつき日も擬の木はまの夕日哉

遅咲之道探志

溪石 臥高

我峯 乙州

卓袋 逢船

行秀 其角

素堂

夕立

夕立の雲もかくしとるとの空　去来
ゆふだちの晴るや何處よ下駄そらん　鬼貫
白雨や障子かけしれたるさし　嵐雪
ゆふだちふるとしのくれや松の上　太州
夕だちに知らぬ外とるとんるる　其角
ゆふだちの二丁傘ぬるる垣穂の那　傘下
白雨の跡おりぬるや野ら　愚我
夕だちの追ふ足とるとるや対ぐるぐる　隨友
ゆふだちや鉢崎ちらる波一宇　仙化
ゆふだちの行駕ぬにとぶれ　山川
白雨おさしれとるぬるるしるれ　泊蓬
夕だちの原ふちぬるとる松木かる　荆口

簟

ゆふだちぬ降る静なる　毛羅
白雨の去けはるれつ山ぬ上　昌房
夕立ぬ跡うて廻る山田かな　子祐
ゆふだちやとるれる牛の門ちる　李下
夕立や樽の臭のとるきり　以有

江山や沼沸の屏風ぬるひろ　宗因
さみや近江おりて氏　簟　其角

竹婦人

竹婦人も拭数なり竹婦人　卯七
抱翁や姦かへきのふる　其角

涼

破風くちみ日影やようこれ夕涼　芭蕉
涼しきふ榎もみぐれ木蔭ろる　玄旨
そそぎして涼しや宿の這入こち　荷兮
夕ふ夜汐とろりになるふ涼みる　去来
かけ涼し松示きして落日和　宗因
ちぶね人と語問答そそみかる　鬼貫
犬ふ逃お汐追ふ狩のそそみ哉　嵐雪
そしさのかそうなれや夜半は色　負室
翠簾うけて維妻なくへ涼さ舟　秋色
水と羽と合せ行軒や夕そそみ　沾徳
小簾風ふ山里そし腹の上　丈草
わもかとの人ふ逢ろ夕そそみ　加風

そそしきや檣の下ゆゝろのおと　俊似
涼しけ汐ひそれてのとは川辺ろる　未學
桃燈のとこゆらゆしそそみふる　卜枝
船涼三粉ハかしまと沖へゆく　秋風
名涼し檣よりのそく茶の白ひ　巴山
我舟と涼むさまなり波しすり　ちし
洋や魂ろうと川そそみ　柴雪
そそしきや帆ふ船ひはちし雙　其角
琴ひいて老とかませよ夕すそ　智月
牛ふなれ合点そ朝涼夕そそ　支考
そしきやうゝ彩えゆきとろり　里東
涼しけやすりそ波ろりの口は砂　旬空

風薫

打水

このあたり二三度めしと涼すゞみかな　野坡

ともされぬ木綿さらしや風の音　山川

かたびらの脊中にふはと涼みかな　衛門

てりかくも尾花吹わたるすゞみかな　一笑

故郷を出て家一夜涼む戸口哉　土芳

たゞしきや物いふ声も瓜の小屋　鈎壺

はつ浪や風の薫りの相ひゞし　芭蕉

目に耳にあふるゝ風はかをりかな　鬼貫

帆をかぶる鯛のはつゑや風薫る　其角

うち水にのとれたるみや梅の中　丈草

ちら川やそゞの垣穂に夏の月　卓袋

心太

真桑瓜

沖鱠

むそや祇園ともしにむかふさし　宗因

皿鉢に験のけあけやところてん　其角

え門のうちは呼せんところてん　序令

柳からて荷を涼しさや真桑　芭蕉

児の手は玉にもあまる真桑かな　嵐雪

白くてもなき味なしまくは瓜　鬼貫

すゝりけて真桑もみえぬ暑哉　去来

茶はとりはみを洗ふや真桑瓜　正秀

酢徒利が水をあやまちそ沖鱠　八董

沖鱠よれをとりてしをれよし　曉臺

清水

城あとや古井の清水まん月人　芭蕉
拔ようるあつ後清水の元草鞋　嵐雪
をぬくひのもとやもあるねさうれ　宗因
六玉川高野の外に清水ゆる　去来
をみきりて塩子の沖は清水哉　俊似
帷子ハ清水ゆるてゆくさうれ　尚白
迄をねつとふむとふ清水哉　一髪
連あすこまくせて結ふ清水この郷　文淵
松風よ袋の底よ清水この角　一道
我跡へ鍬屑(イグチ)ちよる清水ゆる　許六
山蔭やちうつう体音長ゆる　邪七
ゆみとえてやこ立廊る清水ゆ　嵐水

井

旅人の足あとまるる清水ゆう郷　仙化
あんあくの跡ゆ清水の古ゆ　其角
此度の縁は下ゆくさうれ角　治徒
落合ゆ音形くなりし清水ゆる　蕉村
ちくし井や底ゆう寒い人の声　桐雨
きくしあや清世ハかるる水ゆう　嵐雪
さらし井や男あつまる大兵五　洛々

汗拭

尋常の紅巾さうきや汗拭ひ　嵐雪
角折いうな持ゆれあせぬうひ　千那
生の松ゆうに忘れんあせ拭ひ　其角

夏痩

川狩

秋近し

不二詣

夏やせは能因なれども小食なり
なれども痩と思ふる人と見るまでもや
なれやせやせる唐土の半妃なる
川狩やまのらし給ふ手柄なる
川なりやもとし木蔭ふ支流ニ
知るとなるまは秋近し故なる
能かへはこんはの名も秋なし
ちる雪ふ思ふ雪ふ富士詣
角帽子雪ふ凋むやふし詣
武士ふ川越ふ富士まうで

其角
風子
友静

我峯
愚心

此節
涼邨

其角
素堂
雪裏

法被

人並の鯔をも越ふり御被川
夏ふふふ目の行方や浴衣掛
彼ふ扇一度ふ流ふ御被ふ角
吹降の合羽ふそふくこそふ川
ふふふまし豆腐ふりまく山被川

宗因
嵐雪
未学
其角
琴風

冊

法師

宗因

卯の花ふ及摺宮しふ川流山
うはふ那ふふふふ面ふ廉起ふ
行のふふふふ隣あふふふれ嵐
卯はふ花ふ雨のあふふふ皆の跳
うのふふふふのふふふふ曇ふ
卯はふ面の塔ふはなふふふ毎の垣
うのふふふふ角のふふふふ窓明ふ

去来
校風
之道
楚舟
支考
土芳
野坡

若葉

むら雨にはくらね柘榴の若葉哉　素堂

世をしのぶ若葉の雲はめきわけ　其角

ひとしきれ蝶もうらはくてうそか那　楚舟

よしあしをしらで若葉の若葉かな　定良

おりひとつてみ人きぬの若葉哉　宗因

若葉にふく風やゑゑとは刻よし　嵐雪

非情にも毛亦き枇杷の若葉かな　鬼貫

まことろそ我は身延の奥をとへん　敬雨

きり株の若葉をとれは櫻への宮　不交

若葉からちくに流めの名木か那　藤蒔

夕立にすゝ若葉のうへの若葉かな　荊口

若楓

借る心の青きにとへやかへかへて　其角

物食に若葉しぼるやまる桐　嵐竹

馬に若葉の風折くやわらかくて　卓袋

さらりけなれ剣事をましかわる楓　兎峯

葉櫻

葉ちるくに花曲らしや鞍にふみ　鬼貫

あるとしとろり散のとりても櫻かな　沾荷

えもゝくろや遠れ屋家のうそくに花　蝶羽

實櫻

さくらんぼは実合に暖らん芳野の山　一鉄

山櫻實成りてあかさも色も哉し　彫棠

茂り

嵐山藪の茂りや風おとち　芭蕉
川芎のうまさうに白ふ茂りかな　嵐雪
神〳〵と春日あけてはるらかな　鬼貫
ちけてゆく草庵の姥や秋の晴　宗因
光をあふ一ツの山れきりこの那　去来
茂のあと今朝ふ雨不とこの茂て我　子珊

夏木立

ほ川ちこのゆ椎の木もあり夏木立　芭蕉
たちたの本社ふいつちなる木立　昌維
鷺の羽は淺黄ふ成ゆくや夏木立　希因
夏木立ちもとの木はこふ猿の声　安枝
蜘の巣ふあへきりのなり夏木立　鬼貫

下闇

須磨寺ふ願ね留まく木下闇　芭蕉
雨ふ木の下闇はる帷子の京　嵐雪
下闇や牛は御前を腹へらし　百里

青嵐

うき雲や左右ふ別れて青嵐　史邦
麻服巾吹落しまきあをし　巴流
色とし〳〵もなりなるあを嵐　嵐雪
雨ぐれて松の白ひや青あらし　支流
樹ふた破風の光りやなを嵐　百里

常盤木（ときわぎ）

松風の落葉ふ水の音よとし　芭蕉
夏ことふ嵐なふめるも常盤哉　負室

桐の花

かみさりのなくて暮りし桐の花　史邦

桐の花青そらうせてそのこねり　猿雖

塀とこしふ大工はうしやきりの花　図友

此うろり降う南や或りはそ彩る木の中ゆかつもし桐の花　子兼

花柚

柚の花は昔ちのうん料理の写　芭蕉

ゆはもや度へりるついてあり　彫棠

行家もう母へ花柚とまるひとと　言水

柚の花よ仇名あこ酔むろしろ　佑徳

夏柳

蓋とれば蚊の花井戸や夏柳　一蒐

祝ふあて風呂炭むりしろう柳　宗俊

青梅

青梅下れのれう生ふ蔵ふ　岩泉

青梅やあ乳無ろう妻の孔かくし　幽笊

あを梅やそはまりのれ袋　入松

撈

撈佩てうさとめろしやたは者　嵐雪

干物のむしろ初むやそる撈　白雪

うき雲やあふちの花よ蛙の声　図友

温飽打とまりふくりあふち哉　素覧

水まさのくもう撈のそなの法　平吉

栗拾ふ

世のくれはそうけねそ彩や彩の栗　芭蕉

湖はなきはちるや栗拾ふな　風弾

合歓

象深や両よ西越う稲ふの香
合歓のあけぬうてねるむ清水哉

芭蕉
仙花

覆盆子

枝撥や伏るしてういちと
手の跡を忘れる甲斐のいちご哉
皇紙の復盆子ゆ踏る是森哉
水うれは微をとりまくいちと角
井の底は蛇を忘るへし夢いちと

重則
陳由
朱紬
杜地
山川

青うめ

古寺や伽うめうと接梅の花
掃そめうない日和くさるうめ哉

三園
度江

柿の花

此中の古木わらつれかきのえ邪
樹は花蟻のちりをそうはうな

此筋
可廻

百日紅

さるすべりも花ゆハあるね百日紅
ちりぶちや百日紅の散る日そ

其角
支考

燕子花

杜若ゝれゆ発白れおりひ
そ紅はなる人蛇のゆくやかまうと
ゆをそ沈れそれふをしくよ杜若
獨寄る舟はくふせんかりのうき
植ゝるゝ冊ききの燕子花
吾を白は下るおく形りうをうき

芭蕉
太草
宜雪
周也
桃西
成之

牡丹

寒うぐれ雪や牡丹のくれの蜜　芭蕉
土嘗くるかむろ牡丹なる　嵐雪
我々分の細くるりさやはしん畑　鬼貫
咲ふるりふるんさまは紅牡丹　一井
蝋燭ゐちまりかくるるうれ　許六
一先ハほうん嶺くる豆まうす　路健
牡丹えふうつちりとよれ唐茶哉　桃隣
頭刺る袖とてくぶきゐとえる　猿雖
藤ゐ起川牡丹のはるみひくくを　濤波
淮宿そ穴明き岩ゐ紅ゐうん　毛紈

芍薬

芍薬も紅とりの紅と考れるり　紫紅
す隠もすしむ芍薬の花えう非　有也
麦の穂や芍薬埋む里のせと　自笑

葵

刺さけの葵とくさむ烏帽子ゑ　魯丁
野草ゐ丈のとくく葵この有　岩泉
おも痩てゐふひつける葵ら匹　荷兮
蛍えゝ酒は夕新ゐゐめふ　仙化

苔の花

蛭は卵ゑまくく初ふ法く苔のくる　野坡
いつふせくく蹄て咲ちりあけの花　希因

芥子

白芥子や附西の花は咲けるゝ人　芭蕉
給出せ花さゝけしのひとそゝる　来山
駒寄の一下濱苗子そ芥子の花　去来
芥子散て直ふ実をそる夕ゝ那　李桃
ちるとも水児そ拾ひぬけしの花　吉次
人はゝと散るとそ思ね芥子は花　洋水
咲ちるとゝ初まゝきけしの品我　傘下
まさゝや馬秋ゆとゝる笠の芥子　太草
大枝る西ふとゝ人しけしのそゝ那　東巡
いくほとの世ふきれいゝまゝしの笠　支考
京出ゝ泊りゝとゝ芥子はそゝ那　里東
青くまき白ひもあひしけしの花　嵐蘭

竹

竹の子

前のそゝ那裾きゝびなり旅とゝも　嵐雪
なきけゝまき名武ゝひもせそる前　風聯
竹の子や雪踏ふまて嵯峨の坊　嵐雪
筆やかり森の床はそゝみよりも　鬼貫
ゝ毛身の牛は子うれし竹生路　去来
子ふはれて孫るまゝゝや去年の竹　太草
垣根こし牛の子現く厩この那　全峯
竹の子や境目もゝゝと二歳生　智月
ゝけのふはちゝゝを流よたゝふ人き　凡兆
筍のちゝらはきけ打ゝそゝりか南　猿雖
下りゝる牛の子盗むゝゝりれ　玄梅

蕗

いろこきて蕗の葉かれるおふくても
草刈やふきのなかりの蔓のもと　里東
子ふきのうとしの人の迷ふきの葉　汶村
　　乙州

茄子

苞いまこ青なすうるやなとし汁　芭蕉
赤味噌ふのあるれるまりる初茄子　北枝
一本の茄子もあまたをるひるれ　杏雨
神垣ふ茄子もひとりもちけふ久し　園友

藜

五とりせん藜の杖なる日まく　芭蕉
元政の軒かちこふあさろこの角　西瞿

紅の花

紅の花も海のかさりや朝熊ゆ
きるもおろね麦はこりやるふの花　去来

夏菜

蝿なるる一枝ごとんなりのあきく　山店
夏菜やるとしの前ハ先人咲く　甚角
ふとりとしむ法師のこるる夏の菜　抛候
なんきこやられも西ふハあくきしたる　旭芳

撫子

るてーるやあ貧法ふ人ごとふむらん　越人
撫子ふ蝶ふとーてをもく川あり　嵐蘭
なてーるのそろなた前のつきこ我　猿雖

百合

橘

花ぞなれとかく浮世をくるま百合
姫ゆりやうくよりわりふ協の仏堂
餡ころりの箱ふさいさり百合のくるま
さみくれふ乙ぬもたしゆりけるる
草むらや百合を中く花の新

宗因
素行
崑雪
破笠
芭蕉
鬼貫
木因
桃隣
我峯

後河路やくるる橘も茶の白ひ
夏を落る藤てらくるの紀とりそ
たちくるるやゆるしの柿ことくえくた
橘やちうふおちくふるの裏
あけりのを橘ちらし旅とうを

昼顔

藻の花

ひるかほや米搗塚むあつまり
昼顔くひと書きまし塗るの跡
動る白やや夏山伏の笠 佐くふ
昼顔やともに刈ふ麦をうけ
枯柴に昼顔昼一足のまわ
ひるかほやロハ墨れとれ花ばうり
昼顔に風のとくやまるうめと

芭蕉
野坡
支考
桃隣
斜嶺
沾圃
崑蘭

藻のそるかんをる蛍の蹴戎
藻花てる湖水めらきるや夜の山
潮引く藻の花ちるむ昼の那
藻花さるのときれくや泡の上

胡及
秋風
児竹
桃隣

櫻麻

笑ぬきて中やくらんにくと麻
行ぬけの家のうしろや櫻あさ
三日月はいろう出て居るはらら麻
いろみしてはむふもうくん櫻なさ
誰ふけば鼠なくんさうら麻

青亞
一矣
嵐竹
杜格
普人

紫陽花

紫陽花やかくらう附の蒲鉾
あちさゐを五器よりぶくや艸枕
紫陽花やうの目うしのはひとる
なちさゐふくむ一安き扉うち
常さ見よ伝もなちさゐの色は寄
紫陽花や洒ちかくふ空の色

芭蕉
嵐雪
極扇
伯之
為松
希因

萱艸

せちてさて人の寄わ出くるされ艸
住ハ誰と家と花さくや忘草

来山
燈外

歯やみ

ちくてきさと帰や五天のあやめさき
あいとうう時もあや丸ふきふけり
ちくう尾の長面くふなのやあうな
菓の附面根とくれしう昌蒲ふき
あやあさこと軒さ人ふ所のはのて我
五日ようてあとうなるなのや丸ん北
馬ゆ乗ふる侍きはしたねあやち
匹ぶれのあやあハ雨ゆ直りきり

芭蕉
鬼貫
嵐雪
如泉
荷兮
拙隣
仙化
子珊

夕顔

芭蕉
宗因
去来
野水
大町
市柳
許六
甚角
堤夢
詩六
杉仙

夕ふぐれや秋はいろくの瓢この有
ゆふぐれはさらまの伎は屋目哉
夕顔や名をおとしてる花の形
ゆふぐれの志ゐむ人のまゝふぬる
夕白や沓かくゝとのまくふゆも
山路きて夕ぐれ入てる井中こ那
夕ぐれや一挺のこ伝豆腐
ゆふぐれや一白のこと入れの中と
夕ぐれの這世所ふまりまり
ゆふぐれは花の花の花や油麦
夕顔や ゆくりとこれは出ぬ

蓴

嵐雪
女
柴栗
知足
蝶羽

蓴の実もいきまゝ〜ゆらゆや
鯉とんて蓴のなるなるまふまり
うきくさや恋ゆうと川まゝ
花咲く花うきくさの流ふうく
泥亀や花うきくさのまゝふ

河骨

素堂
嵐雪
蕉村

河骨や絶ふひふるね花はうと
川ゆ絶や掛ふ掛ゆふ夜半 乎
かはほ絶の二本きゝ西の中

蓴菜

万子
太祇

蓴菜の名は人やゝものれるり
蓴さんや去るり〜繁る水ところ

蓮

さゝやくと蓮ゝとうとしけの亀　鬼貫
浦舟の頭ゝ一句ふゝちとうゝ　太草
痛ゝとうと人蓮ふ誘ふ朝ゆふけ　其角
むく起や初ゝゝる蓮数ゝちと　玄梅
蓮の花ちるや八畳のゝゝれに　史邦
客あるゝ蓮ふ蓮の地追ゝん　良品
ゝゝとの香や田い往ゝる水の跡　沾徳
蓮ゝん日ふ月代ゝゝゝゝとも　晨風
鮎のまて蓮ゝゝゝふゝとゝゝ　自悦
吹数ゝてゝのゝゝゝゝちとゝゝ　正秀
笠ゝゝゝゝゝゝゝゝ蓮ふゝふ　古梵

蓮紫

源ゝふ色紫此蓮ゝ風情ゝゝゝん　素堂
ゝゝとのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　白雪

沢深

沢深の蓮ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　嵐雪
ゝゝ蓮ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　鬼貫
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　朝叟

菊の花

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　此筋
菊ゝ花ゝ泥ゝゝゝゝゝゝゝゝ　鈍可

ゝゝ氣刈

暗の子ゝ袋ゝ入ゝ一ゝゝゝゝ　邑姿
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　且菜

若竹

若竹の竹のうきたちかげのえん　宗因
昼蓬や若竹そよぐ山はきぬ　走草
下そよぐふとけるき竹のみ家ゆゑ　仙花
若竹や西追ふ風はそよ吹のと　路徑
ろろ竹や水の中てのそよぐき　和泉
いろ竹の香ゆあらふ〜元鹽ろ系　百里
若竹のうふ蛍み盃ろ雀ろ郷　亀洞
そろそけゆ涼しき声やセッ鶏　車来

林檎

まゆとゆもまんこ入油ておも忘し　其角
ゆらしきも紅ゆあきき林檎ろ郷　百里

任意
書房
正風氏
国立国会図書館
昭和
第1993号
受入
30.3.14